

新刊紹介

奈良本英佑著『パレスチナの歴史』

高橋理枝



明石書店、2005年

昨年九月、イスラエルは四〇年間占領してきたガザから撤退した。身をよじて泣き叫び強制退去に抵抗するイスラエル人の姿は記憶に新しい。他方、西岸では国際司法裁判所で違法とされた分離壁の建設が着々と進行している。この壁によって西岸の町村は分断され、通学や通勤、通院などパレスチナ人の日常生活に大きな支障をきたしている。紛争解決への見通しは未だに暗い。

本書は、パレスチナ紛争がどのようになされたのか、何が解決を困難にしているのかを、紛争の歴史的な経緯を追いながら、丁寧に解き明かしている。読者としては大学生や高校生、

中東やパレスチナに興味を持つ一般社会人が想定されているため、その体裁はちょっと分厚い読み物といったところである。ただし、パレスチナ紛争に関わる重要な文書（国連決議や独立宣言、オスロ合意等）の抄訳が本文中の各所で紹介されている他に、巻末には略年表、主題別の主要参考文献リスト、事項・地名・人名索引が掲載されているため、パレスチナ紛争についての入門書としても活用できる内容となっている。

著者は、パレスチナ紛争は、一言で言えば「パレスチナにおける先住民と移民との対立・抗争である」が、他の地域の紛争とは異なる特殊な性格を持つと指摘する。それは、パレスチナの地理的・文化的な位置に由来する。パレスチナは、ユーラシア大陸とアフリカ大陸を結ぶ戦略的要衝であり、またユダヤ教、キリスト教、イスラームの三宗教共通の聖地であることから、ヨーロッパ列強をはじめとする諸大国の覇権争いの舞台となってきた。この特殊性のため、「ユダヤ教徒、イスラーム教徒の宿命的な宗教対立」、「ユダヤ・アラブ両民族骨肉の争い」といった「常識の嘘」が流通してしまっていると著者は言う。

本書は九章立てで、古い時代から順に歴史を辿っていく構成になっている。第一章で古代からの歴史について簡単に触れた後、第二―四章では、列強の勢力争いを背景に、二つの大戦を経てイスラエルが建国され

る過程を追っている。イギリスは第一次大戦後にオスマン帝国からパレスチナを委任統治領として獲得し、そのイギリスの後ろ盾を得てユダヤ移民が続々とパレスチナに到着した。これによってユダヤ移民とパレスチナに住んでいたアラブ住民との対立が発生するわけだが、イギリスが事態の収拾にいかにも失敗したか、シオニストが戦後処理の過程で勢力拡大を争う米ソからいかに支持を獲得したか、ナチスの台頭とホロコーストによって国際世論がいかにシオニストに有利に働いたか、これに対してアラブ指導層がいかに脆弱でほとんど組織的な抵抗ができなかったか、が描かれている。

第五―九章は、イスラエル建国から、オスロ体制が完全に崩壊し暴力の応酬が続く二〇〇四年までの歴史を辿っていく。イスラエルが国家としての機構を整え、土地の接収や入植地の建設を通して着々とイスラエル化を進めていく一方、解体されたアラブ人社会では、パレスチナ・ナシヨナリズムが芽生え、ゲリラ組織が結成された。PLOは国際的にも認知され活発な外交活動を行うが、エジプトがイスラエルと単独講和したこと、イスラエルで右派政権が誕生したこと等によって、苦境に立たされた。第八章では、こうした状況に大きな変化を与えた第一次インテイファダ（一九八七年）がイスラエル占領下の西岸とガザでいかに発生し、紛争の展開にどんな影響を

与えたかが詳述される。続く第九章では、オスロ合意と一連の和平交渉が取り上げられ、この交渉でパレスチナ人に認められたのは何か、なぜ交渉が行き詰ってしまったのか、描き出される。

ナチスによるホロコーストの産物としてのイスラエルと、そのイスラエルによって土地を追われ人権を侵害され続けるパレスチナ人。両者の紛争を解決するには、著者が指摘するように、イスラエルユダヤ人の迫害に対する不安を取り除き、同時にパレスチナ人の権利と人間の尊厳を回復するような、国際的な保障の枠組みが必要である。しかし、パレスチナ紛争が発生した二〇世紀初め同様、今も大国の利益と合致しない声は政治的な力を持たない。

イスラエルとパレスチナの間の対話を試みた人々をとりあげて紹介するコラムには、双方の立場と歴史を踏まえた相互理解を希求する著者の姿勢が表れている。著者はパレスチナで医療援助を行うNGOでも活動しており、パレスチナ紛争関連の海外の新聞記事を翻訳してメールで配信している。筆者もこのメールマガジンを利用してはいるが、紛争の展開や、紛争の中での人々の日々の暮らしを垣間見ることがができる。蛇足ながら最後に紹介しておこう。

日本パレスチナ医療協会

<http://www.tone.jp/jona/>

（たかはし りえ／アジア経済研究 研究所書館）